

# 禪學研究

## 禪一般と禪堂教育の近代化

鈴木 大拙

ほんやりと其日々々を生きて行く分には、去年と今年と大した差もないやうであるが、少し考へごとをする人々にとりては、吾等は實に容易ならぬ時代に遭遇して居るのである。ここで何かしかとした考へを持つて、近き將來だけに處する方針でも用意しておかぬと取り返しのつかぬことになる。政治や經濟の方面は言ふまでもないが、宗教について何かの關心を有して居るものは、將來の日本に於ける佛教の使命につきて、大に考へなくてはならぬ。佛教全般につきては言ふまでもないが、ここでは禪と禪僧と、禪堂教育につきて私見の一端を述べて大方諸賢の示教を仰ぎたい。(註、時間がないので、十分の事は他日を期する。)

いつの時代でもさうであるが、何か仕事をしようと思ふと、考が二つに分れる、一つは保守的、一つは進歩的又は自由である。この二つが相争ふにきまつて居る。保守系は意志性を持つて、歴史や傳統にからまる。自由系は知性に富んで居て、餘り從來のかかはりに囚へられない。それで一はもとのものをそのまま保存したいと云ひ、一はそれを毀して、

何か新しきものを作り出さんとする。保守系は老人型であり、自由進歩系は青年型である。時勢の變革は大抵青年型の心理とイデオロギーで成就せられる。老人は過去に屬し青年は未來を擔當するので、これは自然である。併し老人はいつも保守と云ふことでなくて、青年が餘り破壊に熱中して向ふ見ずな事をやるものに對して、中和又は牽制の役割をつとめることにある。世の中に果して進歩と云ふことがあるか否かは別問題にして、何か動いて居るものがあると云ふことだけは疑へない、さうして此動きは大抵一直線ではなくてジグザグである、或る意味では振子式である。これを一進一退式又は一上一下式と云つてもよい、律動性をもつて、波動的であるのが生命の實相である。それ故、たゞ一概に保守式がよい、自由式がよいときめて仕舞ふわけにゆかぬ。出来るなら穩健に計畫するのが一番であらう。併し計畫はさうでも實行になると、又何れか一方に偏するであらう。人間萬事そんなものである。が、何か言はなくてはならぬので、自分は左の如き考を持つて居ると表白する。

徳川時代からずつと今まで一貫して残つたものの一に僧堂教育がある。一般の教育制度は維新を境界線にして大變革をやつて居る。各藩独自の教育法が撤廢せられて、日本全國に統一的官僚的——或る場合では軍隊式の教育制が布かれた。それがため善いこともあつたが、悪い事も中々からずあつた。教育制度が統一せられると、日本國民の誰も彼もが一定の枠の中へはいつてしまふ、それが一般の知的標準を高めたことはあつても、人物の型がきまつてしまふので、拔群の人格者、世界大の經綸をもつたものなどは出て來ない。今度の戦争でも平凡な軍人、考も何もない軍人、眼孔豆よりも小さな政治家連に引率せられて、益々深く泥田へ足を踏みこむことになつた。殊に軍人の教育と云つたら人道などを考へる邊もないほどに無茶苦茶のものであつた。兵卒は人間としては取扱はれなかつた。海外諸國で行はれた諸般の殘虐行爲も畢

竟するに軍人が異常心理の持主であつたと云ふことから出立して居るのである。教育の大事なことはこれでも其一端を察することができよう。

僧堂教育には百丈以來の禪精神が籠つては居るが、從來の東洋的な考へ方もはいつて居る。それから白隠的看話禪に附帶して居る特種の精神訓練法も加へられて居る。それ故に禪堂教育に近代的精神を吹き込まんとするには、禪そのものの研究方法にまで切り込んで行かなければならぬところもある。

それでまづ禪は何のために修するかと尋ねて見る。

それは云ふまでもなく已事を究明するものである、自性を見んとするものである。六祖慧能は、一切萬法、自性を離れざることを悟つて、次の如く云つた、『何ぞ期せん、自性本と自ら清淨なることを。何ぞ期せん、自性本と不生不滅なることを。何ぞ期せん、自性本と自ら具足することを。何ぞ期せん、自性本と動なく搖なく、能く萬法を生ずることを。』と。修禪の目的が此の如く自性を明めることに在るとすると、集團生活の如きは却つて此目的の達成を妨げるものとさへ考へられぬこともないであらう。専ら已事を明めんとするには成るべくは外境の煩雜から自由になることが望ましいとも考へられる。禪堂のやうに十人でも二十人でも頭を聚めるとすると、それは既に集團生活であるから、左右との交渉が面倒になる、又従つて仕事が増えて来る。自分一人ならどうでも好いと思はれることでも、集團のためにはさうも行かぬことがいくらでもある。その意味で云ふと、僧堂生活は却つて已事の究明の助けにならぬとも考へられよう。『野外に綿絶して、一把茅底、折脚鑑内に、野菜根を煮て喫して、日を過ぐす一方が、多衆鬧熱の裡に起臥するよりも、佛祖不傳の妙道をして胸間に掛在せしめるに好都合であるとも考へられよう。僧堂生活は果して已事の究明に必要不可欠の設備だらう

か。

それから看話禪と僧堂との關係を見るに、その間にも必ずしも不可分離のものはない。看話禪も禪であるからには、それが僧堂でないとして研究せられぬと云ふ理窟はない。却つて自ら靜かなところに屏居して密參潛修する方がよいとも云へる。看話禪なるが故に僧堂での修行が要ると云ふ事情はない。歴史的に言へば、禪堂の制度は看話禪發生以前のものであるから、禪堂内には看話禪でも亦然らざるものでも俱に包容可能であらねばならぬ。現に曹洞禪も僧堂内で修せられること、白隱的臨濟禪のそこで修せられると同様である。

細かい事は兎に角として、大體の上において、修禪と僧堂制とは不可分のものでないと云ふことだけは云ひ得らるであらう。

嚴密な意味で、歴史上何時頃から『教外別傳、不立文字』が唱道せられ出たかわからぬが、何れにしても、禪と文字とは疎遠になり勝な關係の上に立つて居る。禪は體驗を主とし、文字は抽象的概念的になり易いので、兩者相容れないまでも、反對の方向に走らんとする傾向を持つ。それで禪堂創設以來禪僧は文字を疎んじて勞働を重んずることになつた。この傾向が僧堂史を一貫して流れて來たので、僧堂教育と云へば、行持綿密と云ふことが直ちに頭に浮ぶが、思想的に深遠なもの、文字的に該博なものを聯想し得ない。この意味で僧堂制は修禪のために或る程度の助長又は補足の施設であると云ふことが出來よう。併し本質的には兩者の間に何等の交渉はないのである。

但、かういふ事は云へる——僧堂も一種の學校であるから、世間の學校のやうに、成るべく環境的條件を單純化して行

くことに勉める。さうして其結果は一種の粹又は型に入つたものを鑄出することになる。どこかの學校を出たもののやうに、僧堂出身のものは一種の鑄型をもつ、即ち『禪僧』といふ型にはまつて来るやうになる。それが實際の生きた複雑を極めた世間の眞中に出て、どの位の役に立つかは、その人の更に一段の工夫と鍛錬と内省とに待たなければならぬ。僧堂を出たから、それで直ちに一人前となつたものと心得て、大きな面で世間を歩かれては、その人の値打は問題にならぬ。それで悟後の修行なるものが大に強調せられる、實際を云ふと、僧堂は温室のやうなもので、そこで暖められて咲いた花は、世の荒波に堪えられぬのである。本當の禪僧は世間に出てから更に數段の修行をつむことによりて始めて光明を發するものである、佛の慧命は此處で始めて續がれるわけである。

集團教育は元來鈍栗の背比べである、それで僧堂生活も集團性を孕んで居る限りこれを免かれない。が、僧堂教育はまた一面に個人的要素が閑却せられないので、各自の特異性の大に發揮せられる機會のないこともない。この點では世間一般の教育と相異なる。併しそれだと云つて、己事の究明を主とする禪が僧堂でなくては出来ないと言ふ事情はないのである。

ところが、看話禪が次第に隆盛を極めるやうになつてから、僧堂と看話禪との間に一種離れ難きと見られ得る關係が出来たのである。それで看話禪の擁護者は、自ら僧堂制を昔のままに保存しようと云ふ努力をするのである。それは何かと云ふに、元來看話禪なるものは禪の本義でないのである。禪が次第に下り坂になつて衰亡の途を辿るやうになつたのを見て、その道の人は、『これではならぬ』と云つて、これを喰ひ止めようとする方策を講じたのである。それが看話禪の始まりである。看話禪には、それ故に、人爲的なものが附帯して居る、さうして時代の變遷はこの附帯的なものをして、却

つてその本質的なものに取つて代らんとする傾向を生ぜしめんとする。これは何事につけても出て来る自然の事象で、禪と雖、これを免かれ得ないのである。看話禪の人爲性・技術性は最も能く僧堂制によりて運用の効果を上げることが出来る。教育と云ふものは元來人爲的なものであるから、此點で看話禪の妙處を活かし得るのである。

僧堂生活は兎に角衣食住を保障してくれる、最小限度に近いものにして、如法の行動さへして居れば、その點に於いて心を煩はさなくてよい。即ち專一に己事を究明し能ふことになる。僧堂の生活者はたとひその悉くが深く人生につきて何か思ひ悩んで居ると云ふことでなくても、其中には眞面目な宗教的情操の持主もあるにきまつて居る。彼等は始めは公案と云ふものと、自分等がそれ／＼に當面して居る人生の問題とは、果して如何なる關係を持つて居るかにつきて、何等の了解もなかつたに相違ない。只師家に對して無限の信仰を持つて居たので、師家の授くる『隻手の聲』とか『天地未分前』とか『無』とか云ふ無意味の話頭に參じたものであらう。これが分れば自分等の悩んで居る問題に對して解決がつくと云ふことなのである。かういふ風に考へることは、師家を無條件に信することによりて可能である。一方に自分はわからぬと云ふことがあつても、あの人がわからしてくれようと云ふことには、直ちにならぬものである。それで師家其人の力量を信ずると云ふことは、また禪なるものに對して無限の信仰を持つことにもなる。傳來的に禪にはお悟りなるものがあるが、そのお悟りによりて、生死の問題がわかるとか、天地の不思議がとけるとか、人生諸般の難問題に結末がつけられるとか云ふことを信じ、そのお悟りは禪の授けるところ、お師家さんの證據してくれるところと、——まづこのやうな順序を逐うて僧堂へ掛錫して來たのである。而してこのお悟りの鍵は公案によりて手に入られると云ふことになるので、參禪者は亦公案に對する無上の信仰をもつと云ふことになる。つまり參禪者は公案と云ふ無意味なもの、それから出るお悟り、そのお悟りの證人である師家、さうして最後に、或は最初に、佛教即ち禪なるものに對しての信仰——このやうな

ものを抱いて參禪辨道に勵むことになつたのである。僧堂教育はこの信仰の上に立てられると云ふべきであらう。果してさうだとすれば、僧堂教育と看話禪とは、或る程度まで有機的關係を持つと云はなくてはなるまい。僧堂制を從來のまま保存して行かうと云ふ人々の間には、此有機的關係に重點をおいて居るものが多いと云へる。

僧堂教育の最後の形態、即ち今代生活に最も恰好した形態を決定するには、如上の所述だけでは、まだ不足である。尙次の諸項に關する愚見を述べべき必要がある。まづ禪そのものの性格について尙述べなくてはならぬものがある。

看話禪が禪のすべてを悉くさず、今日は却てその短處を助長する傾向さへあることを云はなくてはならぬ。又禪は知性的特色は著しいが、情性面において限られたものを持つて居る。たとへば永遠の悲願、無盡の祈り、存在そのものと離れられぬ業についての懺悔道など云ふものについて、禪は満足した解決を與へて居ない——即ちこのやうな問題に對して惱みぬいて居るものに對して十分の清算をしてやらぬ——と云ふやうなことを論述して見なくてはならぬ。禪そのものは限定性ではないにしても、禪者には獨善の性格が顯著である。これは禪の知性的傾向から出るものである。獨善性は社會的集團的生活の眞只中に没入することを能くせぬ。垂手入鄮と云ふことはあつても、それは集團的組織を持たぬ、尙獨立孤行的である。此點に於いて禪又は禪者は近代性を缺いて居る。これも十分に詮索しなければならぬ。

それから禪者には知識がない、近代人としての一般的教養又は高級な常識とも云ふべきものがない。禪堂教育は封建制度下では一人前の禪僧を作り上げたであらうが、今日では却つて近代性と遠ざかるやうな傾向さへある。禪は個人的經驗であるが、又これを知性的に分析し論理づけることを忘れてはならぬ。これを忘れることは禪經驗をして澁晦ならしめることである。見性掌を指す人は、またこれを知性的に社會的に組織的に他に示し得る人でなくてはならぬ。僧堂教育は一方

むきに知性を排斥してはならぬ。知性の優秀は近代人の特色である。禪も禪者もこれを自主的に十分に取入れなくてはならぬ。これに敗れると禪はその限定性を強調することに止まるであらう。

大體是等の諸項目について愚見の開陳がないと、禪そのもの、禪者及禪堂教育などについて、讀者の御參考になるものを、十分に申上げ得ないのであるが、昨今の生活ではその餘裕がない。今度はこれで擱筆の已むを得ぬものがある。讀者の諒察を仰ぐ次第である。(九月八日)

シゼロはシシリ島の出納官吏だつた時、われわれをうつとりとさせ何もかも忘れさせる木苺や生ひ茂つた雑草の中に、アルキメデスの墓を探してゐたが廢墟の中に石に刻まれた幾何圖形によつてそれを見分けることができた。

圖形は球に外接した圓嚮であつた。事實、アルキメデスは初めて圓嚮の直徑に對する此の近似値を知つた人で、これから圓周と圓の面積、球の表面積と容積との關係を引き出した。かれは球の表面積と容積とは外接圓嚮の表面積と容積との三分の二であることを證明したのである。このシラクサの學者は、壯麗な墓碑銘を蔑視した。墓碑銘の代りにただ自分の定理を刻んで誇りとしたのである。幾何圖形はアルファベットで綴られてゐるやうに、はつきりと人物の名を語つてゐた。

アンリ・ファブル